

前回個人研究発表まとめ

「アドルノにおける交換の批判と、交換されえないもののあり方について」

志田 圭将（本学言語社会研究科修士課程）

本報告では、Th. W. アドルノによる交換の批判を検討し、交換されえないもののあり方について考えるための展望を示すことを目指した。そのために、対象にどのように関わるのがその対象を交換可能なものにするのか、という観点から検討を行った。最終的に、主体として対象に対して常に一定の仕方で働きかけることが対象を交換可能なものにするのであり、この固定的な関わりを脱した場合に生じうると考えられる「規制されていない経験」の場において交換されえないものが現れるのではないかと結論した。

まず、あるものが交換可能であるとはどのような事態であるのか、このことを確認するために、アドルノが「交換社会」と呼ぶ社会のあり方と、そこであるものが交換の対象となる場合に働いているメカニズムについて検討した。この検討を通じて、あるものが交換可能なあり方をしている状態として次の二点を指摘した。それは、あるものが普遍的なものの一事例と化している状態、あるものが何かに対するものとして存在する状態である。

次に、アドルノが、交換において生じているものと同じメカニズムを、認識における「同一化」の働きに見て取っていることを指摘した。同一化とは、あるものを「～として」規定する働きであり、何かについて思考するにあたって不可欠の契機である。この働きに基づいて、諸対象を等置することが可能になる。この同一化の無反省な形態が、アドルノの批判する「同一性思考」である。同一性思考とは、個別的なものを普遍的なものの一事例として把握し、自身に対してのあり方のみを対象に見出すものであり、この点で、交換とそのメカニズムを共有している。

このことを踏まえ、同一性思考を遂行する主体とその対象との関係に注目した。同一性思考とその思考が関わる対象との両者の関係は、単に常に決まった仕方で働きかけるだけのものと、そのように働きかけられる限りでのものとの関係である。それゆえ、主体が同一性思考を遂行し、その固定的なあり方を保持する限り、その対象のもとに主体にとって新しいものは現れてこない。これに対して、そのような主体の固定的なあり方を揺さぶる出来事にこそ、アドルノが「(規制されていない) 経験」という言葉で意図しているものの実質があると指摘した。アドルノは、経験とは「新しいもの、まだ存在していなかったものの経験」を経験することだと述べている。この経験の場において、同一性思考によっては捉えられない対象のあり方が主体に対して現れてくるのではないかと結論した。

質疑応答では大変有益なご意見・ご指摘を頂いた。まず、思考とはただちに同一性思考であるのかというご質問に対して、報告者は、そうではないが、交換社会のような特定の社会関係においては同一性思考の遂行が不断に要請されると回答した。とはいえ、アドルノが思考を、また思考と社会との関係を

どのようなものとして捉えているのかについてより正確に把握する必要があると考えている。これに関連して、もしもアドルノの認識論を同一性思考／経験という二項対立で捉えたとしたらそれは適切ではないのではないかというご指摘を頂いた。これを受けて、同一化と経験を二項対立的にはないかたちで検討し、両者の関係を明らかにすることの重要性を改めて認識した。また、仮に〇〇を経験したと言う場合にそこで満たされるべき要件を挙げることはできるのかというご質問を頂いた。これに対して報告者は十分に回答することができなかつたため、今後の課題としたい。